

学習英英辞書を比較する



中邑光男

「英英辞書には親しみを感ぜない…。」

このように感じる英語教員は少なくないだろう。しかし英英辞書をじっくり読むと、彼らがふと「横顔」を見せ、「息づかい」を感じさせてくれる瞬間がある。

当然であろう。最近、辞書を語ることばには、コーパス、データベース、電子辞書など「機械的」なものが多い。しかし詰まるところ、辞書は執筆者、編集者の判断の集合体であり、すぐれて「人間的」な資料であるはずだからだ。

この考え方に立ち、本稿では利用者の立場から学習英英辞書を比較し、その「横顔」や「息づかい」の一端を紹介したい。

本稿で取り上げるのは、われわれが使う頻度の高い、次の英英辞書の最新版である。基本動詞である break を例に取り、「特徴」「定義」「用例」「MFS」について、それらを比較する。なお MFS は My Favorite Sentence の略。英英辞書が「素顔」を見せる用例を取り上げたい。

- *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (OALD) (2005)
- *Longman Dictionary of Contemporary English* (LDOCE) (2003)
- *Longman Advanced American Dictionary* (LAAD) (2000)
- *Collins Cobuild English Language Dictionary* (COBUILD) (2003)
- *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English* (MED) (2002)

- *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (CALD) (2005)

■ OALD : 「老舗の辞書」

特徴：初版は1948年に出版された英英辞書の老舗。最新の第7版巻頭にも初版のサンプルページを掲載しており、伝統を重んじる態度はまるで京都の老舗旅館のようだ。それだけに変化には慎重なのか、第7版は第6版にマイナーチェンジを施したものである。

定義：Oxford 3000と呼ばれる3000語の定義用語彙が担当する。LDOCE の2000語では不十分だと感じる英語教師にとっては心地よいサイズだ。

“to do sth that is against the law” のような従来型の定義に加え、COBUILD の影響を受け “when the day or dawn or a storm breaks, it begins.” のように文で定義を与える場合もある。しかし文タイプの定義の総数は控えめで、従来型定義の伝統を保持しようとする強い意志を感じさせる。

なお、意外にも、文化、特に食べ物の紹介に熱心な辞書だ。6辞書の中でこれだけが bran tub や bread-and-butter pudding を取り上げている。

用例：用例は少なく、用例平均単語数は8.6語と6辞書の中で最小である。つまり用例には無駄がなく、成熟度が高いと言えよう。COBUILD の用例 Jurassic Park had broken all box office records. に対して、The movie broke all box-office records. を示し、淡泊だ。

MFS：She longed to break in on their con-



versation but didn't want to appear rude.

用例まで上品だと思いませんか？

■ *LDOCE* : 「user-friendly な辞書」

特徴：学習者にとり便利な点は積極的に取り込む。色使いは明るく、イラストも多い。コーパス調査の結果をいち早く取り入れ、進取の気性に富む。派手でサービス精神に富む姿は「大阪的」。

Updated Edition (2005) に付属する CD-ROM は、8万8000用例の発音を収録する優れものだ。英英辞書が CD-ROM の情報や使い勝手を競う時代に本格的に突入したと思わせる。

定義：2000語の語彙を使う。*OALD* の3000語に対し、2000語だけで定義を行ったことに、この辞書の user-friendly な姿勢がよく表れている。

定義の示し方は、*OALD* のように従来タイプにこだわることなく、文タイプと従来タイプを使い分けている。ここでもフットワークは軽い。

用例：多くの例を示す。文の長さや読みやすさの点で、*OALD* にも匹敵する円熟の技を見せているのは意外。

MFS：Many British firms have failed in their attempts to break into the American market.

同じ Longman の米語辞書である *LAAD* では We think this product will help us to break into the Eastern European market. とある。がんばれイギリス企業！

■ *LAAD* : 「*LDOCE* の米語版ではない辞書」

特徴：Longman 発行の米語辞書だが、*LDOCE* とは性格を異にする辞書に仕上がっている。

その象徴は地味な色づかいだ。*LDOCE* と違い、赤や青などは使わずに意味やコロケーションは黒のゴシック体で示すのみ。

定義：2000語を使う点は *LDOCE* と同じ。しかし類似点はそこまで。*LDOCE* で使われている when を if に変え、情報を付け加えるなどの細か

な芸が目立つ。「私は *LDOCE* とは違う！」と自己主張している。

● *LAAD*: if a boy's voice breaks, it gradually starts to sound lower, like a man's voice, sometimes doing this suddenly as he is speaking

● *LDOCE*: when a boy's voice breaks, it becomes lower and starts to sound like a man's voice

用例：この辞書の最大の「売り」はゴシック体で示した数多くのコロケーションだ。他の辞書が “break for lunch” しかあげていないのに、“break for lunch/coffee/dinner etc.” を示し、情報量が豊富である。

用例も *LDOCE* のものを「使い回し」せずに、別物を用意している。*LDOCE* より数を減らしながらも1文あたりの単語数を増やし、バラエティ豊かな表現を提示している。米国の文化・風習を感じさせる英文を多く収録している点も特徴だ。

No one has yet found a way to break down the hatred between the two ethnic groups.

MFS：Sir, sorry to break in on your meeting, but your wife is outside.

アメリカ映画の一場面を見ているようです。面白いというよりも怖い…。

■ *COBUILD* : 「こだわりの、読むための辞書」

特徴：画期的だったフルセンテンスの定義法は、他の英英辞書でも採用され、新鮮さが失せた。しかし、語義の右側に記載されている詳細な語法注記は *COBUILD* だけの特徴だ。

語法情報は、主にライティングの参考になる。たとえば、「関係を断つ」の意味の break には

V with n; V from n; V n with n

の注があり、break with ～, break from ～, break ... with ～ の3用法があると即座に分かる。

定義：フルセンテンスの定義の情報量は多いが、

求める語義を探すのには苦勞する。コロケーションを知るにも1つ1つ定義を読まなければならず、時間がかかる。この辞書は読むためのものだ。
用例：用例数は6辞書で最大、用例平均語数も最大である。The Bank of Englishから用例を採用したために、用例に「物語性」を感じる(A)。反面、固有名詞や省略符号付きの用例が多い(B)(C)。外国文化の知識が乏しいと、分かりにくい用例も含まれている。用例として実例を使うという「こだわり」も、ここまでくると、感心する。

- (A) Because he was being so kind and concerned, I broke down and cried ...
 (B) Mrs Southern listened keenly, occasionally breaking in with pertinent questions ...
 (C) The plate broke ...

MFS：He went into TV and got his first break playing opposite Sid James in the series 'Citizen James'.

海外のテレビ事情に疎い私には、この文の本当の意味が分かりません。

■ MED：「見やすいレイアウトの赤系色の辞書」

特徴：見やすく、コンパクトなレイアウトを持つ辞書だ。基本語の意味を表にし、薄赤の色を使い目立たせている。

語の定義の後で代表的なコロケーションをまとめてゴチック体で示し、非常に見やすい。

定義：なぜか、定義には *OALD* と *LDOCE* の中間にあたる2500語を使っている。基本語の意味を見やすく一覧表にしている点はいい。しかし、残念なことに意味を羅列しているだけで、この表によって頭が整理されることは期待できない。

- 1 separate into pieces
- 2 fail to obey rules
- 3 make a hole/cut
- ...

句動詞は break の下位項目ではなく、見出し

語扱いしている。慣れれば問題はない。

用例：用例の数は最小で、最大数の用例を示す *COBUILD* の60%程度にとどまる。用例の難易度は平均的。この辞書の個性はあまり強くないが、用例についてもその印象を同じくする。

MFS：Some women broke with tradition by going to study abroad.

21世紀の日本ではこの英文はぴんときません！

■ CALD：「意味のナビとイコール記号の辞書」

特徴：単語だけでなく句動詞にも GUIDEWORD と呼ぶ意味の標識を立て、検索性を高めている。英語の表現を他の英語で言い換えるためのイコール記号を活用しており、「英文英訳」を楽しむことができる。

定義：break そのものの意味は10しか取り上げていない。*OALD* の22, *LDOCE* の15と比べてもその少なさが分かる。ただし句動詞については、同じ形でも意味ごとに別項目としており、「見出し」の総数は慣れないと使いにくいほど多い。

break sth in **SHOES** phrasal verb [M] to wear new shoes or use new equipment for short periods to make them more comfortable: My new hiking boots will be great once I've broken them in.

分かりにくい英語を簡単な英語で言い換えるためのイコール記号は *OALD* の「売り」だったが、今では *CALD* の得意技になってしまった。ちなみに動詞の break だけでも20も使っている。

The enemy were unable to break the **code** (= understand it and so make it useless).

用例：数、読みやすさともに *OALD* とほぼ同じ。数は少ないが、読みやすい用例だと言える。

MFS：He's broken a lot of girls' hearts.

break one's heart の用例で heart の複数形を使ったのは *CALD* のみです。まじめな私たちには思いつかない用例ですね。

(なかむら みつお・関西大学教授)